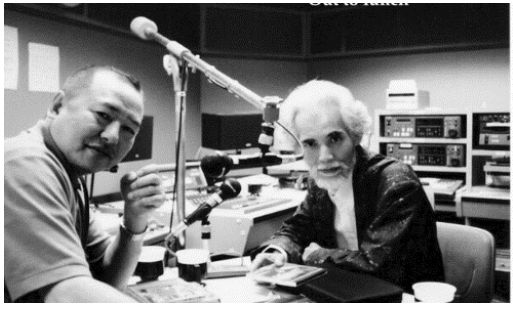
「序章」

黄ばんだ頁を繰ると
半蔵門のスタジオが
ぱっとうかびあがる

旅立ってしまった友と
マイクに向かうあの日が視える

昨日

滅んでいくその様は
物狂おしいほどの沈黙



「平岡正明との再会」

平岡さんが逝ってもはや半年が過ぎた。「DJ2:again」の出版にあたり、僕の記憶の中に息づいている彼に会いに行くことにした。まずは出会いからだ。

1999 年 8 月、うだるような暑さが続く夏だった。昼客のひけた後、冷房を止め、裏庭の日陰に身をこごめ風に当たっていた。電話が鳴った。横浜在住の杉田という御仁からで「評論家の平岡正明が、ぜひ貴方にお会いしたい」と。「平岡正明ってあの『あらゆる犯罪は革命的である』を書いた方ですか」。そう僕が問うと「そうです。平岡先生は貴方が『MJ 無線と実験』に書いている真空管アンプの製作記事を、二十数年来愛読しています」。

かの名著「あらゆる犯罪は革命的である」の著者平岡正明が、僕の MJ の製作記事を愛読していたとは。電話を切った後、噴き出した体中の汗がすうっとひいて行くのを感じた。耳を覆いたくなるほどの蝉時雨の中、僕は電話のそばにただ立ち尽くしていた。

それから数日後、やっこさんはやってきた。杉田、末次といういかにもレフターくずれの編集マン二人を従え、恰幅のいいお内儀と共に。

店に入って来るなり、挨拶もそこそこに奴はこう言った「オイ、タバコ、タバコ」と。「心臓を手術して、タバコをやめて三年も経つのにまだそんなことを言っているんですか」。お内儀にそうたしなめられ、照れ隠しに頭をかく仕草で僕を見てニコッと笑った。「粋な男だなあ。江戸っ子だな、この人は」。後に問いただすと四代続いた江戸っ子とのこと。「佐久間さん、俺が江戸っ子だって、よくわかったな」と本人が感心していたが、水商売を永くやっていると、たいがいの人の素性が見えてくる。その筋の兄い、酒場づとめの流れ女、大会社の会長、代議士の先生等いろんな人に接してきた、たかが飯屋の主の慧眼とでも言っておこう。

平岡さんが店に入って来た時、チューバの吹き口を切り取り、そこにウェスタンの古いドライバー720A を取り付けたスピーカーシステムが、小さな音で古いタンゴを奏でていた。

「カルロス・ガルデルの『想いの届く日』じゃないか。それにしてもこのヘンテコなスピーカー、いい音を出すな」。

その時僕は奴が只者ではないことを悟った。ガルデルの『想いの届く日』を知っているなんて、そうめったにお目にかかれない。また、楽器のチューバをスピーカーシステムとして鳴らしている音を、即座に褒められる人もそうざらにはいない。奴は音楽評論ばかりではなく、オーディオにもかな

り血道をあげた人だな。いい人に巡り会った。この人なら話しが合いそうだ。

その日、旧式のクーラーが生ぬるい風を送り込むカウンターで、お内儀と杉田氏はハンバーグをつまみにビールを飲みまくり、僕と平岡さんはいろんなジャンルの音楽をかけながら何時間も雑談を交わし、ドライバーをかねた末次氏は酒の代わりにタバコを吸いまくり、二人の雑談を延々とテープに収めていた。

杉田氏と末次氏が主催する『Out there』という音楽雑誌が近々陽の目を見るとのこと。僕にもライターとして参加しないかと、平岡さんに勧められひとつ返事で OK した。かの平岡正明と同じ雑誌に名を連らねられるなんて望外の幸せだ。

それからまもなく TOKYO FM のミュージックバードのプロデューサー岩崎なる御仁が、DAT の電助を携え取材に見えた。あの平岡正明が千葉県館山市にあるレストラン・コンコルドにおいて、その店主佐久間駿と数時間にも及ぶ雑誌の対談をやったと小耳に挟んだとのことだ。

彼が社に帰って二三日後電話が来た。「番組やってもいいですか」。「いいよ。だけど一人で二時間はきついから平岡さんと一緒なら」。岩崎氏が平岡さんの了解を取り、二ヵ月後の 1999 年 10 月、番組はスタートした。